



ハット・ プロブレム

10月23日

Sudden Fiction Project

高階 經啓
hirotakashina

10月23日のおはなし「ハット・プロブレム」

「ねえ、その帽子脱いだら？」掃除機をかけながら女が言う。またか。うるさい。同じことを、もう何度目だろう。「建物の中で帽子かぶってるとはげちゃうよ」

そんな俗信にだまされるほどぼくはバカではない。ぼくは返事をせず振り向きもせず本に集中する。そうだ。ぼくは本を読んでいるんだ。見ればわかることだ。どうしてそれを邪魔したりできるんだろう。無神経なバカ女だ。

「そろそろ掃除が終わるからさ、そうしたらちょっと一緒に外に出ない？」行きたきゃひとりで行けばいい。そっとしておいてくれればいいのにどうして構うんだ。「そんな怖い目で睨まないでよ。ちょっと誘っただけじゃない」

しまった。あんまり腹が立ったので思わず女の方を見てしまった。別に怖い目でにらんだつもりはない。でもまあそう感じたのなら、それでいいだろう。女は困ったような顔をして肩をすくめると、くるりと背を向け掃除機を持って玄関ホールの方に進んだ。がたんがたん乱暴に掃除機をかける音がする。怒ったのかも知れない。それでいい。そうして、他の女たちと同じように辞めていけばいいのだ。

これでやっとゆっくりできる。ぼくはこの巻を一気に読み上げてしまうべく本に専念する。ネット上の紹介にあったとおり『金枝篇』は示唆に満ちていて、読んでいて飽きることがない。いろいろなことが、これでわかるような気がする。それこそ、ありとあらゆる肝要なことが。

彼らは一体何者で、何を目的としているのか。この世界をどうしようとしていて、それを阻むにはどうすべきなのか。書かれた意図とは違うかも知れないが、ぼくにとってこの本は戦闘のためのマニュアルだ。世界を彼らのほしいうまにさせないための闘争にとって、実に示唆と洞察に満ち満ちた本だ。

「帽子取った！」

笑いを含んだ声が出て、背後から忍び寄った女がいきなりぼくの帽子を奪った。振り向くと女はサイズの大きい野球帽を手にして、声を立てて笑いながらぼくから遠ざかろうとしているところだった。

「返せ！」

思わず声を張り上げてしまう。一言も口を利く気はなかったのに。腹が立つ。女がへらへら笑いながら振り向き、そして凍りつく。ぼくを見ながらみるみるひきつった表情になる。

「返せ！」

もう一度ぼくは言う。女はまたしても困惑した表情を浮かべ、そして恐る恐るという感じで言う。

「それ、何？」何のことを言っているのか、もちろんわかるが黙っている。女はぼくの野球帽を両手で持ち、しばらくその場にたちすくみ、言葉を選び、そして言う。「自分で作ったの？」

バカ女だ。決まっているじゃないか。

「よくできてるわね。でも安心して。わたしはあなたの心を盗み見たりしないから」

女の口からそんな言葉が出てくると思っていなかったのだから、ぼくは驚く。何と言っているかわからないのもう一度「返せ」と繰り返した。女は野球帽を両手で持ったまま肘を伸ばし、あまりぼくに近づかずにすむ姿勢でそっとぼくに手渡した。ぼくはホイル・ハットの上から野球帽をかぶった。野球帽の下で銀色の思念波遮断帽がぱりぱりかさかさ音を立てた。

「そんなに驚かないで。それ、知ってるわ。子どものころ、わたしも作ったもの」そう女は言

うと、また言葉を途切らせる。「そんなふうでできなかつたけど。誰があなたの頭の中を読むの？」

黙っているとまた女が言う。

「何か言ってきたりするの？」

ぼくは首を横に振る。別に話しかけられたりしたことはない。ただ覗かれるのがいやなだけだ。

女はため息をついて続けた

「お父さんかお母さんに心を読まれるの？ わたしが子どもの時には、ある日、両親の中に異星人が住み着いたことに気づいて……」ぼくの様子を見て女は言う。「ああ。おんなじなのね。わかるわ。でも黙っといてあげる。きっと彼らはホイル・ハットが何なのかもわかっていないわ」

女はしばらくぼくを眺めたり、天井を睨んだりしていたが、やがて肩をぎゅっと寄せ上げ、すんと落とすと言った。

「それにしてもあなた器用ね。わたしの作ったのはもっとぶかっこうだったな。そんな洒落た渦巻き模様なんかできなかったもの。どっちかというつつぶれたポウルみたいになっちゃった」

そこはちょっと自慢だったのでぼくも少しうなずいた。

「ねえ。作り方教えてくれる？」女は意気込んでいった。「アルミホイル、どこにある？」

(「アルミホイル」 ordered by kyouko-san/text by TAKASHINA, Tsunehiro a.k.a.hiro)

感謝の言葉と、お願い&お誘い

Sudden Fiction Project（以下SFP）作品を読んでいただきありがとうございます。お楽しみいただけましたでしょうか？ もしも気に入っていただけたらぜひ「コメントする」のボタンをクリックして、コメントをお寄せください。ブログへの登録（無料）が必要になりますが、この機会にぜひ。

「気に入ったけどコメントを書くのは面倒だ」と言うそのあなた。それでは、ぜひ「ツイートする（Twitter）」「いいね！（Facebook）」あたりをご利用ください。あるいは、mixi、はてな等の外部連携で「気に入ったよ！」とアピールしていただけると大変ありがたいです。盛り上がります。

※星5つで、お気に入り度を示すこともできるのですが、面と向かって星をつけるのはひょっとしたら難しいかも知れませんね。すごく気に入ったら星5つつける、くらいの感じをご利用いただければ幸いです。

現在、連日作品を発表中です。2011年7月1日から2012年6月30日までの366日（2012年はうるう年）に対して、毎日「1日1篇のSFP作品がある」という状態をめざし、全作品を無料で大公開しています。→[公開中の作品一覧](#)

SFP作品は、元作品のクレジットをきちんと表記していただければ、転載や朗読などの上演、劇団の稽古場でのテキスト、舞台化や映像化などにも自由にご活用いただけます。詳しくは「[Sudden Fiction Project Guide](#)」というガイドブックにまとめておきました。使用時には、コメント欄で結構ですので一声おかけくださいね。

ちょっと楽屋話をすると、7月1日にこのプロジェクトを開始して以来、日を追うごとにつくづく思い知らされているのですが、これ、かなり大変なんです（笑）。毎日1篇、作品に手を入れてアップして、告知して、[Facebookページ](#)などに整理して……って、始める前に予想していたよりも遥かに手間がかかるんですね。みなさんからのコメント、ツイート（RT）、「いいね！」を励みにがんばっていますので、ぜひご協力お願いいたします。

読んでくださる方が増えるというのもとても嬉しい元気の素なので、気に入った作品を人に紹介して広めていただけるのも大歓迎です。上記Facebookページも、徐々に充実させてまいりますので、興味のある方はリンク先を訪れて、ページそのものに対して「いいね！」ボタンを押してご参加ください。

10月からは「1日1篇新作発表」の荒行（笑）を開始し、55作品ばかり書き上げる予定です。「[急募！お題 この秋Sudden Fiction Project開催します](#)」のコメント欄を使って、読者のみなさんからのお題を募集中です。自分の出したお題でおはなしがひとつ生まれるのって、ぼくも体験済みですが、かなり楽しいですよ！ はじめての方も、どうぞ気軽に遠慮なくご注文ください（お題は頂戴しても、お代は頂戴しないシステムでやっています。ご安心を）。

こんな調子で、2012年6月30日まで怒濤で突き進みます。他にはあんまりない、オンラインならではの風変わりな私設イベントです。ぜひ一緒に盛り上がってまいりましょう。

ハット・プロブレム

<http://p.booklog.jp/book/35360>

著者 : hirotakashina

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/hirotakashina/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/35360>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/35360>

公開中のSudden Fiction Project作品一覧

<http://p.booklog.jp/users/hirotakashina>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.